
LOST COIN 番外編

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOST COIN 番外編

【Nコード】

N9668D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

自作小説「LOST COIN」シリーズの短編番外置き場です。主人公はいろいろ。

TWO DEVILS (前書き)

魔界でのワンシーン。

特に意味なし、オチなし。

拍手用に書いたやつです。

TWO DEVILS

褐色の肌の剣士は、彼らが『現世界』と呼ぶ人間たちの世界から帰ってきた。

途端に肌に触れる空気が冷たくなり、光量が減る。

薄暗く肌寒いこの土地が彼の住処だった。

他に生き物の気配はない 果たして彼を生き物と呼ぶかどうか、その点から考えねばならないが。

全く動きのない岩石のみが永久に続くかと思われるような大地に彼は一人佇んでいた。

炎妖玉と碧光玉が一つずつ嵌め込まれた眼には光が溢れている。
ガーネット サファイア

まだ少年のあどけなさを残した顔に不釣り合いに鍛え上げられた褐色の肢体。黒髪から短い角が飛び出しているが、頭上に戴いた金冠と背に湛えた二枚の純白の翼は明らかに天界に端を発するものだった。

この世界を支配するのはすべて精神だ。イメージと意志の強さがそのまま力の強さにつながる。武力はもちろん、何かを生産する事も破壊する事も簡単だった。

ただ、願えばよいのだから。

そうやって魔界屈指の剣の使い手と呼ばれたマルコシアスは魔界の西方に屋敷を建てた。彼が最も大切に思っていた女性が住んでいた家に似せて。

現世界の「王都」と呼ばれる都市にあるその屋敷には今、彼女の子孫が住んでいる。子孫の中でも最も濃く血を受け継いだ青年が苦悩しながらも「生きている」。

だが、マルコシアスたち悪魔に生命活動という概念はない。気がつけばそこに「在った」。

それが自分の始まりだった。それ以前も、その瞬間も記憶にはなかった。誰かに作られたのかも分からなかった。

一人で住むには大きすぎる屋敷の壁は、魔界では珍しい白だった。褪せることのないその色ははるか遠くからでも目視できる。敵視する者がいればすぐに発見されてしまう。マルコシアスはこれまで何度も敵対する悪魔を撃破してきた。退けた悪魔たちは彼に忠誠を近い、いつしかそれは30もの軍団になっていた。

翼があるので玄関から入る必要は全くないのだが、いつも地上に降りて扉から入る事になっていた。

白い壁に浮かびあがるような黒塗りの扉を手で開ける。

正面に飛び込んでくるのは大広間だ。真っ赤な絨毯を敷き詰めた玄関ホールは吹き抜けで、天井を見上げれば大きなシャンデリアが目に入る。また、真正面に6枚の翼を湛えた純白の天使像が安置してあるのが目を惹いた。

この屋敷には彼以外誰もいない。

朝も夜もない魔界、生命活動を行わず翼で自由に飛び回る悪魔たちにとって「家」という概念は薄い。

マルコシアス自身もここを「家」だと思ったことはあまりない。ところが、その時は迎えてくれる声があった。

「よ マルコ」

吹き抜けになった二階のバルコニーの金色の手摺に、天使が腰掛けていた。

金髪に碧眼、切れ長の眼の整った顔立ちをした美しい男性は蒼を一滴溶かし込んだ色の翼を二枚背負っていた。一枚の布を巻きつけただけの姿で、均整のとれた肢体がいくらかあらわになっている。

口元に湛えた笑みから、どうやら上機嫌である事が分かる。

「珍しいな クローセル」

マルコシアスは突然の訪問にもさほど驚かなかった。
天界にいる頃からの友人であるクローセルは、見た目にそぐわぬ
子供のような心を持っている事を熟知していたからだ。

「黄金獅子の末裔に 会っただろ？」
「ああ」

マルコシアスは鷹揚に頷いた。

黄金獅子の末裔 黒髪と漆黒の瞳を持つまだ少女と呼べる年だった。利発そうな眼と誤魔化しを知らない心がゲーティア「グリフィス」によく似ていた。先祖にあたる男と同じ鋭い洞察力と物事の本質を瞬時につかむ才能を持っている。

今はまだ少女の領域を出ないが、もうしばらくすれば極上の美女へと変貌を遂げるだろう。

「あいつ 俺を見て 何て言ったと思う？」

にやにやと口元に笑みを湛えたクローセルはひどく嬉しそうだった。

付き合いの長いマルコシアスでさえこんなクローセルの姿を見るのは、現在の使い手ファウスト家の長女と契約した時以来だ。あの少女に一体何を言われたというのだろう。

バルコニーからふわりと降りてきた天使は褐色の肌の剣士の顔を覗き込むように言った。

「『天使さんみたいだ』 だぜ？ 信じられるか？ マルコ」

天使。

それは彼ら堕天の悪魔がはるか昔に捨ててきた称号だった。
魔界屈指の剣士も思わず口元を綻ばせた。

「ふふ 堕天した我々を未だ 天使と呼ぶ者がいたか」
「信じられないがきんちよだよなあ」

そう言いながらもくすぐったそうに笑うクローセルは心の底から
喜んでるように見えた。

マルコシアスの心にも温かな明かりが灯る。

クローセルもマルコシアスも主を追って慣れぬ魔界へやってきた。
それからもうどれだけの時間が流れたか知れない。感情の起伏に富
む人間の精神では耐えられぬほど長い時間を、ただ「存在してきた」
。

気の遠くなるような時間において感情など必要なかった。

「アレイとの出逢いを 思い出す」

「お前 嬉しそうだったもんなあ あの時」

「お主もだ クローセル」

「俺 ねえさん 大好きだから」

二人の悪魔は、人間との出逢いを通して少しずつ感情を作り出し
ていった。

それは初めて触れるものだった。

クローセルの去った後、マルコシアスは一人屋根の上に立ち魔界

を見下ろした。

動くものなどない岩石だけが永遠に続いている大地。
この世界を今は少し違った目で見下ろす事が出来る。

「レティ」

感情を知らなかった当時は、何もかも分からないことだらけだった。

どうしてあんなに彼女を欲したのかも、彼女が傷つくことをあれだけ厭うのかも、そして彼女が消える最後の瞬間に瞳から零れ落ちた温かな雫の正体も

「我等の息子は 真直ぐに育っている」

マルコシアスの炎妖玉とレティシアガーネットクロウリーの碧光玉サファイアを受け継ぎ、紫水晶アメジストの瞳を授かった青年。最も血を濃く受け継ぐ、悪魔と人間の直系の息子。

あの結晶に出会った時、マルコシアスの中に感情が芽生えた。
今なら分かる。

あの時涙した理由も、彼女に向けた温かい心も。
大切なものを自覚した時、ただ「在る」だけだった悪魔は生きる事を覚えた。

「最期まで 我が守ろう」

この先どんな事があるうとも。

彼女が残してくれた唯一の忘れ形見を守り抜いて見せよう。
サファイア碧光玉の瞳を瞼の上から撫で、マルコシアスは目を閉じた。
大切な息子の姿を脳裏に描きながら。

TWO DEVILS（後書き）

マルコシアスとクローセルは仲良し。

レティとマルコの番外はいつか書いてみたいなあ……。

HAPPY HOLIDAY - tail - (1) (前書き)

「LOST COIN」と「LAST DANCE」の間に入るお話です。

いつか書こうと思っていた買物話。

HAPPY HOLIDAY - t a i l - (1)

暖かな風がカーテンを揺らしていた。その流れにつられる様にベツドから起き上がって窓に寄る。

絵の具を全面に塗りたくったような青空を白い雲が染め抜いていた。夏が近づいた晴天、出かけるには絶好の日和だ。

先日負った傷は、完治とはいかないまでもかなり回復している。とはいえ、深さからいって激しい運動をすればまた開いてしまうかもしれない。

胸から腕にかけて巻かれた包帯に手を当ててみたが、痛む気配はなかった。

左手首に巻いたチェーンのトップ、鈍く黄金の煌きを放つ2つのコイン。

それを軽く右手で撫でてから外出の準備を整えることにした。

服を着て準備を終えた頃、執事のクリストファー・マーロウがやってきた。既に齡60を越したというのに、背筋もしゃんとした有能な執事だ。

「ぼっちゃま、ミス・グリフィスが到着されました。玄関ホールでお待ちです」

「すぐ行く」

最後にいつものマントを羽織って、部屋を後にした。

純白のリュシフェル像が正面に安置されている玄関ホールに着くと、肩までの黒髪を揺らした少女が出迎えてくれた。

「おはよう、アレイさん！」

「朝からうるさいな。もう少し大人しくできんのか、このくそガキ」
ため息をつきながら言うと、少女はぷつと頬を膨らませた。

「だって楽しみにしてたもん。いいじゃん」

20歳近いだろうに、年相応でない顔をした少女は軽い足取りでこちらに向かってきた。

大きな漆黒の瞳が目を惹く、誰に言わせても美少女と呼ぶであろう容姿をしたこのくそガキは稀代の天文学者ゲーティア・グリフィスの唯一の子孫だった。

ここグリモワール王国では悪魔崇拜が基本だ。そのため、王国に仕える天文学者は魔界から悪魔を召還して使役する。その契約の証が、450年以上も前にゲーティア・グリフィスと初代ダビデ王が創った72個のコインだ。

コインそれぞれが72人の悪魔との契約の証。一つ一つに悪魔紋章が刻まれたそれは国家天文学者、俗にレメゲトンと呼ばれる者の印だった。

自分も王国に仕え、悪魔を使役する天文学者だ。左手首のコインはその印だった。

「行こ、アレイさん！　ねえちゃんが馬車貸してくれたよ！」

大きな瞳がにこりと微笑む。

仕方がない。約束だ。

嬉しそうに駆け出した少女を追って、屋敷を後にした。

屋敷の前に止まっていた小さな馬車に乗り込んだ。

4人がけだというのにわざわざ隣に座ったガキの漆黒の瞳が嬉しそうに微笑う。

「楽しみだね！　おれあんな大きな街歩くのは初めてだよ！」

「そうか」

走り出すとき特有の圧迫感で軽く押さえられた後、馬車は屋敷から出発した。

王都ユダ・イスコキウトス。

王族の住むジュデツカ城を中心として、パラディソ外郭、プルガトリオ外郭、2重のインフェルノ外郭の計4枚が取り囲む城塞都市である。ジュデツカ城は一段小高い丘の上にあり、このくそガキ

わく『モンブラン』のような形状をしているのがこの都市の特徴だった。

自分達が住むのは2枚目のプルガトリオ外郭内、貴族達が屋敷を構える場所だ。

加えて今日なぜかくそガキと2人で向かう事になったのはプルガトリオ外郭の外、平民が軒を連ねる王都のメインストリートに広がる市場だった。

このくそガキがどうしても行きたいと主張して、どういうわけか自分が保護者として連れ添う事になってしまったのだが……年に似合わない阿呆の鳥頭、よく言えば天真爛漫さを持つこのくそガキに丸一日振り回されるのは目に見えたようなものだ。

「迷子になるなよ」

「はい」

3歳児のように素直な返事をした少女を見て、もう一度大きくため息をついたのだった。

HAPPY HOLIDAY - tail - (2)

プルガトリオゲートを出ていくらか城下町に近づいたところで馬車を降りた。

帰りの迎え時間を確認してからガキと2人、メインストリートの市場へ向かった。

「ねえ、アレイさん！　すごいよ！　ヒトがいつぱいだよ！」

まだ中心街でもないというのに、ガキは興奮して叫んでいる。通行人が奇異なものを見るように過ぎていくが、そんな事お構いなしだ。

いつもと変わらないデニムのショートパンツに淡緑の短衣、腰のベルトには短剣を提げていた。丈夫なブーツから形のいい脚が伸びているのが周囲の視線を惹きつける。田舎町ならともかく、この王都で妙齡の女性がする格好ではない。

遠くから早く早くと大声で呼ぶくそガキの声にもう一度大きくため息をついた。

メインストリートの端に到着すると、くそガキはぽかりと口をあけて呆けてしまった。

「広い……」

かろうじて桃色の唇からそんな言葉が滑り落ちたようだ。

立ち止まってしまったくそガキは明らかに通行の邪魔だった。行き交う人々にぶつかり、人ごみにもまれて流されていく。足をもつれさせ、よろけながら遠ざかっていく。

本当に仕方がない奴だ。

届かなくなる前にぱつと手を掴んだ。小さな手が離れまいと一生懸命握り返してくる。

そのままぐい、と引きつけて隣に引き戻した。

「ありがとう、アレイさん」

にこりと笑って見上げてきた。その素直な言葉が気恥ずかしくてすぐに手を振りほどく。

「次は知らん。離れるな」

「はあい」

気の抜けるような返事をしたくそガキは、代わりにマントの裾を握った。

お前は3つのガキか!!

突っ込もうとしたがいかんせん人が多い。とにかく流れに乗らなければ。

そのままの状態でメインストリートを進んでいった。

メインストリートは主に食料品の露店が多い。それも、ユダ川の水運が発達しているおかげで種類は非常に豊富だ。海から運ばれてくる魚介類、山からもたらされる果物類、ひどく奇抜な色をした鳥が逆さに吊ってあるのも見える。少し横道に入れば遠い異国から運ばれてきた装飾品を売る異国人の露店多い。

特に最近では北の大国ケルトから流入する美しい宝石類の行商が増えている。広大な土地を有するケルトでは輝光石ダイヤモンドをはじめとして虹灯玉サンドライトなどの珍しい鉱石も産出している。寒冷な気候で、グリモワールや周辺各国と比べると農作が発達していないケルトにとって、宝石での利益は通貨獲得の大部分を担っていた。

マントの裾を握ったまま、きよろきよろとあたりを見渡しているくそガキは、何か見つけてぱつと駆けだした。

ちよつと待て!

慌てて人ごみの中を追いかける。

「見て見てアレイさん!」

この人波の中で見えるか!

「これ欲しいよ!」

だからどれだ?!

自分でも頬が引きつっているのが分かる。
何とか追いついて襟首を掴み上げた。

「勝手に行くな。迷子になっても知らんぞ」

「えーだって」

「だってじゃない」

本当に、何故こんなことになったんだ？

くそガキは目の前に並んだ色とりどりのフルーツを物色し、その中から一つを手をしている。

鮮やかなオレンジの楕円形をしたその果物は、そこかしこから鋭いとげが飛び出しており、両手に余る大きさで一目見ただけで中身が詰まっているのが分かった。

この店では他にも鮮やかな果物が多い。

「それは南方で採れる果物だ。中身は緑色で食感がいいと一時期、騎士団内で流行ったことがある」

「ねえ、買ってー」

案の定おねだりを始めたくそガキを見て、さらに頬が引きつる。

ねえさんからこのガキの小遣いは受け取っているのだが、最初からこの調子ではすぐに無くなってしまっただろう。

「荷物を持ってこの人ごみを歩く気か？ 後にしろ」

そう言っただけで無理やり店から引き剥がした。

「ねえお兄さん、そんなこと言わずに。今日届いたばかりだからどれでも新鮮ですよ！」

売り子の女性がにっこりと笑う。

「ほんと、二人ともお綺麗ですね。ご兄弟ですか？」

「いや、赤の他人だ」

「じゃあ、恋人同士ですか？ 仲がいいですねー」

「違う。どうしてそうなる？」

と、思っていると、目の前で果物の匂いを嗅いでいたはずのくそガキがいない。

「おまけしますよー！」

「だから……」

こんな問答をしている場合ではない。

あいつはどこへ行った？

「おい、くそガキっ！」

最初から懸念していたことが当たってしまったようだ。

案の定、いつの間にかくそガキの姿が見えなくなっていた。

HAPPY HOLIDAY - t a i l - (3)

ああもう、最悪だ いや、いつかこうなる事は重々承知していたはずだったのだが、これほどあっさり実行されるともう呆れて声も出ない。

出なかった声の代わりに、もうすっかり馴染みとなった深いため息をついてから、その姿を見つけるべく歩き出した。

「あ、ちよつと、買わないんですか?!」

追いかけてきた売り子の声は、背中で聞き流した。

普段から愛想がいいとは言えないというのに、さらに自分の眉間に皺が寄ったのが分かる 分かったからと言って不機嫌を隠す気は全くないが。

それがよかったのか悪かったのか、先ほどより人ごみを歩きやすい。どうやら道行く人が自分の事を避けているようだ。

幸か不幸か。

もうひとつ大きなため気をつく。

「……ったく、どこ行きやがった、あのくそガキ……!」

くそガキはそれなりの護身術は身に付けているが、今日は確か丸腰のはずだ。

王都の城下街は、正門からブルガトリオ・ゲートに向かって一字に貫くメインストリートとその中央にある広場から横に長く伸びるもう一本の大通り、そして広場を中心に放射状に通りが四方へ伸びるという特殊な形をしている。そのため、慣れた者でないと、すぐに方向感覚を失い迷ってしまうのだ。

広場を中心としたメインストリートでは市が開かれ、店も多く賑わっているが、所詮は人が集まる場所。負の澱む場所もできる。

下手に迷いこめば……

「くそっ」

あいつなら好奇心で簡単に裏道に入ってしまうだろう。しかも無駄に身が軽いためにこの人ごみで追いつくのは困難だ。

中身はともかくあの容姿だ、表に顔の出せない商売をしている連中に目を付けられること請け合いだ。

どうする？

いや、考えていても仕方がない。

探すしかないだろう　ねえさんに、殺される前に。

メインストリートと主な大通りは大方搜索した。あいつが目を付けそうな店や露店もすべて覗いた。

だが、あいつの姿はない。

つまり、やはりあのくそガキは裏通りに迷いこんでしまった、と結論せざるを得なかった。

しかしこの街の裏通りは迷路のように複雑に入り組んでいる。自分が入り込めば共倒れになる可能性も大きかった。

時刻も昼を過ぎている。あいつのことだ、腹を空かしてはいないだろうか？

「……俺はあいつの父親か」

ぽつり、と自嘲気味に呟く。

そう言えばあいつは自分を父親に従っていたな。そしてねえさんを母親に　ガキの考えそうなことだ。

まだ腕の中にあいつがいた感触が残っている気がする。『怖かった』といって泣いたあいつの涙が、悲鳴が、嗚咽がこびりついて離れない。

何もしてやれなかった

後悔の念がどつと押し寄せてくる。

それと同時に、ふつふつと熱い感情がわき上がってきた。

「今度は、後悔しない」

何もできなかった、と言って悔みたくない。

そう思つてまた視線を上げた時、どこからか大きな破裂音がした。

いったい何事だ？！

周囲が騒然となる。どうやらその爆音が聞こえたのは、ここからそう遠く離れていない。

人ごみがざわりと動き、その音の中心地から逃げるような流れを作る。

巻き込まれそうになったところをなんとか路地裏に逃れて様子を窺うと、少し離れた場所で黒煙が上がっていた。

「東からきた商人の売り物が突然大きな音を立てて破裂したらしいぞ！」

「何人も怪我人がでてるそうだ！」

雑踏の叫びから、大体の流れを把握する。

このところ、東方で開発されたという破裂する粉『火薬』がグリモワール国にも流入し始めている。東方では主に武器として使われているのだが、ゼデキヤ王はそれを好ましいものとせず今のところは全面的に禁止している。

最も、まだ一般民衆の間で認知度が低いそれは、裏の世界で武器として使用するために密に輸入されている。東方との交易はグリモワールでも大きな部分を占めるため、あまりきつく取り締まれないのが現状だ。グリモワールで、いや、全世界中でこの『火薬』を使用した武器が広く量販されていくことはもう避けられないのかもしれない。

いや、そんな事はどうでもいい。

禁止された薬物が破裂したという事は、裏を支配するそれなりに大きな組織に何か異変があったということだ。

「まさか……」

予言のトートタロット・カードを見たわけでもないというのに、嫌な予感が胸中を駆け抜ける。

その予感が外れていることを信じて、人ごみに逆らつて駆けだし

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9668d/>

LOST COIN 番外編

2010年10月10日22時53分発行